大学で何を学び、どう生かす

大野真裕
茨城県福祉相談センター　心理判定員
1983年　筑波大学第二学群人間学類卒業

大学で何を学ぶか、学んだことをどう生かすかは学生にとって大きな課題だと思う。こんなケースもあることを私のささやかな経験からお伝えしたいと思う。

サークル活動を通して

学業にあまり熱心でなかった私が、大学生活でひとつだけよくやったと思うのは、サークル活動である。社会福祉研究会というサークルに加わっていた。現在も多くの学生がそこで活躍されていることと思うが、当時は児童養護施設、知的障害児・者施設でのボランティア活動と自主的な勉強会が主な活動であった。

筑波大学といえば、ともすれば、閉鎖的な環境の中だけで学生生活が完結しがちだと言われていたが、サークル活動を通して、いろいろな出会いや経験をすることができた。

ひとつは学外の人達との交流である。障害者や養護児童（いろいろな事情で家庭的での養育を受けられず、施設や里親などで養育されている児童）との関わりを通して、また施設でこれらの方々の支援、指導に献身的な努力をしておられる職員の方々との関わりを通して、大学の中では得られない貴重な経験をすることができた。施設職員の方々とは、関わっている子どもたちの処遇のあり方をめぐって夜遅くまで議論をしたり、飲み会につきあっていただいたりした。いずれも不規則な勤務の中を学生に合わせてくれたと後に知り、申し訳なさと感謝の気持でいっぱいになった。施設職員といっても、学生であったわれわれと大きく年齢は違っていなかったと思う。しかし、一つの仕事に打ち込んでいる彼等の姿は大きくもあり、まぶしかったという記憶がある。

もうひとつはサークル活動を通して専攻の異なる学生同士（もちろんその中には

身体にハンディキャップのある学生もいたが）の交流があったことである。

人間学類を卒業後、私は筑波大学教育研究科障害児教育コースを経て、茨城県に心理判定員として採用になり児童相談所、知的障害者更生相談所に勤務することになった。福祉の現場を希望したのは社会福祉研究会で養護児童や障害者の福祉の現場に触れた経験があったからに他ならない。

サークル活動を通して出会った、さまざまな背景や考えをもつ人たちを通して学んだことの中に、相手の立場にたって考えたり、感じたりすることの大切さがある。カウンセリングで言う共感に近いものであるが、知識や理論ではなく、実践を通して学ぶことができたと思う。このことは、心理判定員として児童や障害者の相談、面接を行っていく上では不可欠の資質だと思う。

例えば、非行少年や虐待を行う親などの面接において生い立ちや心情を共感的に聴き取ることで、警戒的であった相手の態度が変わってくるということはしばしば経験することである。また、知的障害や自閉症といった障害のある人たちに対しても、彼らには独特の見方や感じ方があり、一見理解しがたい行動でも彼らなりの物の見方、感じ方を理解することで、ニーズに合った適切な支援や関わりができるのである。

卒業論文の作成から

人間学類では心理学を専攻し、児童虐待を卒業論文のテーマに選んだ。このテーマを選んだのも、サークル活動で訪れていた児童養護施設に親から虐待された児童が多く入所し、その背景と子どもの置かれている厳しい現実を施設職員から聞かされていたからである。現在では児童虐待は大きな社会問題となっており、卒業論文で取り上げる学生も多いのではないかと思う。しかし、当時は一部の小児科医師や児童相談関係の研究者が取り組んでいたものの、心理学専攻の一学生が取り上げるテーマとしては少し無謀だったと思う。果たしてこのテーマで教官が受け入れてくれるかどうか大いに不安があった。指導教官としてご指導をいただいたのは杉原一昭助教授（当時）であったが、先生には母性剥奪症候群からのアプローチを指導していただき、「児童虐待は、今アメリカで大きな問題となっている。日本でもあと10年すれば間違いなくアメリカと同じ大きな社会問題となるから、君のライフワークとして取り組む課題だ」と励ましをいただいた。先生のこのアドバイスも、私が児童相談所を就職先に選んだ大きな理由となった。

余談ではあるが、児童虐待は杉原先生の予測のとおり、その後大きな社会問題となっていった。全国の児童相談所で受けた

児童虐待件数は、1983年度は416件であったが1990年度は1000件余り、2001年度には23000件と18年間に実に55倍の増加となった。また、2000年には児童虐待防止法が制定されている。

教育研究科でも修士論文のテーマに児童虐待を選んだが、結局1年2ヶ月しか在籍せず、児童相談所に就職することとなった。指導教官は日本でも早くから児童虐待に関心を持ち論文を書いておられた長畑正道教授（当時）であった。先生は小児科医であったが医学領域にとどまらない幅広い知識と経験をもち、短い期間であったが、実に多くのことを教えていただいた。就職してから実際の相談援助において、長畑先生の指摘ひとつひとつに思い当たることがあり、見立てやアドバイスをする上で貴重な示唆をいただいた。

今振り返ってみると、サークル活動という実践と、教官の指導を受けながら理論的にまとめていく作業の両方を通して、どんな仕事をしたいのかが自分に見えてきたと思う。私の場合、幸いにも児童福祉の現場で心理学を生かした仕事につくことができ、また、大学で学んだことが仕事にそのまま結びつくという恵まれた環境をいただいた。

多くの学生が、将来、自分はどんな仕事をしたいのか模索していることと思う。さまざまな人との出会いから開けていく道もあることを、心にとどめて学生生活をエンジョイしてはいかがであろうか。

（おおの　まさひろ）